多文化共生社会に向けた人材育成

-国際教育の実践を通して-

Fostering Human Resources for Multicultural Society: Through Practices of International Education[1]

神戸大学国際連携推進機構国際教育総合センター准教授 **黒田　千晴**

神戸大学国際連携推進機構国際教育総合センター教授 **リチャード・ハリソン**

KURODA Chiharu

HARRISON Richard

(Center for International Education, Institute for Promoting International Partnerships, Kobe University)

キーワード：国際共修授業、バイリンガル、国際交流、異文化間能力、多文化共生社会

1. はじめに

「多文化共生」という言葉は、多義性を含みつつ既に日本社会に広く浸透し、様々な場面、コンテキストで使用されている。例えば、外国人が集住する地域の地方自治体には、地域のニーズに根差した「多文化共生センター」が設置され、生活者としての外国人の支援や、日本語の学習支援、多様な文化を紹介する地域の交流イベントの開催など、様々な取り組みが行われている。総務省が設置した多文化共生の推進に関する研究会（2006）は、2006 年に発表した報告書において、「多文化共生」は、「国籍や民族などの異なる人々が互いの文化的違いを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」であると定義している。しかし、マジョリティーとマイノリティーが対等な関係を築くのは、容易なことではない。日本社会においては、圧倒的な多数派である日本人が、母語である日本語を介して、外国人住民とコミュニケーションを取る場面がほとんどであり、このような接触場面には、厳然とした力関係が存在するが、そのことに意識的な日本人は多くはないのではないだろうか。今後、日本社会が、高齢化による労働人口の減少を補う一つの施策と

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

して、積極的に留学生の日本での就業支援や、外国人労働者の受け入れを進めるのであれば、一部の志ある人々の熱意や行為によって支えられている「多文化共生」に向けた取り組みだけでは極めて不十分であろう。将来の理想的な社会として、多様な言語的・文化的背景を持つ人々との「多文化共生社会」を目指し、日本社会に住む一人一人が、他人事ではなく「我が事」として、「多文化共生」の実現に向けた数々の課題に真摯に向き合い、そのために必要な知識・能力・態度を身に付ける、少なくとも身に付ける努力をすることが不可欠である。では、多文化共生社会に必要な人材育成という点において、大学教育はどのような貢献が可能であろうか。本稿では、神戸大学国際連携推進機構国際教育総合センター（旧留学生センター）が主として取り組んできた、授業の内外での国際共修の取り組みを紹介し、大学が多文化共生社会に向けた人材育成にどのような貢献をなしうるのか、その可能性を検証していきたい。

2. 神戸大学国際学生交流シンポジウムと国際共修授業の概要

神戸大学では、過去21年間に渡り、キャンパス国際化（Internationalization at Home）促進に向けた取り組みとして、神戸大学国際学生交流シンポジウム(Kobe University International Students' Symposium、以下KISSと記す）を実施している[2]。KISS創設の理念は、留学生及び一般学生が、国籍や言語の壁を越えて、自由闊達に議論し、相互交流を図る場を提供することであり、毎年、一般学生及び留学生（約10名～15名前後）で組織される学生の実行委員が、筆者ら教員アドバイザーの指導の下[3]、企画・準備・運営を主体的に担う学生主導のプロジェクトである。学生の実行委員が、毎年12月上旬の週末に開催されるKISSのテーマを選定し、広く参加者を公募する。KISSは、1泊2日の合宿形式で、学外の研修施設にて開催される。一般学生25名、留学生25名の合計50名が1泊2日、寝食を共にし、日英のバイリンガルで討議を重ね、最終日には、グループごとに議論の成果を日英両言語で発表する。KISS終了後は、実行委員が振り返りの報告書を日英で作成し、約半年にわたるKISSの一連の活動が修了するという流れである。

第1回から第18回まで、KISS開催に至る企画・準備・運営の活動は、正規の授業科目ではなく、課外活動として実施してきたが、一連の教育活動を有機的に結び付ける新たな試みとして、平成25年度（2013）後期より、全学共通授業科目（グローバル共通科目）「グローバルリーダーシップ育成基礎演習」（バイリンガルの国際共修授業）として開講している[4]。

本授業は、本学大学教育推進機構国際教養教育院が実施・運営する全学共通授業科目に設定されており、留学生を含む全学の学部正規生に履修の機会が与えられている[5]。本学では、交換留学生（特別聴講学生）等が、全学共通授業科目を履修することは制度上認められていないが、本授業の性質上、多様な文化的・言語的背景を持つ留学生の受講が望まれるため、特別に内規を定め、本授業科目に限り、交換留学生（特別聴講学生）等の履修を許可している。図1は、「グローバルリーダーシップ育成

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

基礎演習」の授業科目と、KISS との関連を示したものである。

堀江（2015）は、Allport（1979）が提示した多文化接触が偏見の軽減につながる諸条件を踏まえ、多文化間接触の教育効果を高めるための条件として、1）言語、人数、場所、知識量などの点において、各文化グループが平等な立場にあること、2）学習目標、達成目標、評価基準などの点において、共通の目的を有すること、3）教員、TA、授業外の相談、多文化共修の価値の理解など、制度的なサポートがあること、の 3 点を挙げている。本授業では、堀江（2015）が提示した条件を踏まえ、1）各グループの平等性の確保については、一般学生が日本語でのコミュニケーションをリードし、留学生が英語や必要に応じて他の言語でのコミュニケーションをリードするという枠組みを設置した。2）の点については、授業の到達目標、評価基準をシラバス等で明示することに加え、履修生達が、KISS を共に企画・準備・実施するということが、第一の共通の目的として共有された。3)については、これまで課外授業として実施してきた一連の教育活動を授業科目として開講することにより、教員の教育的介入、また共修の時間と空間を確保し、制度的なサポートを確立した。

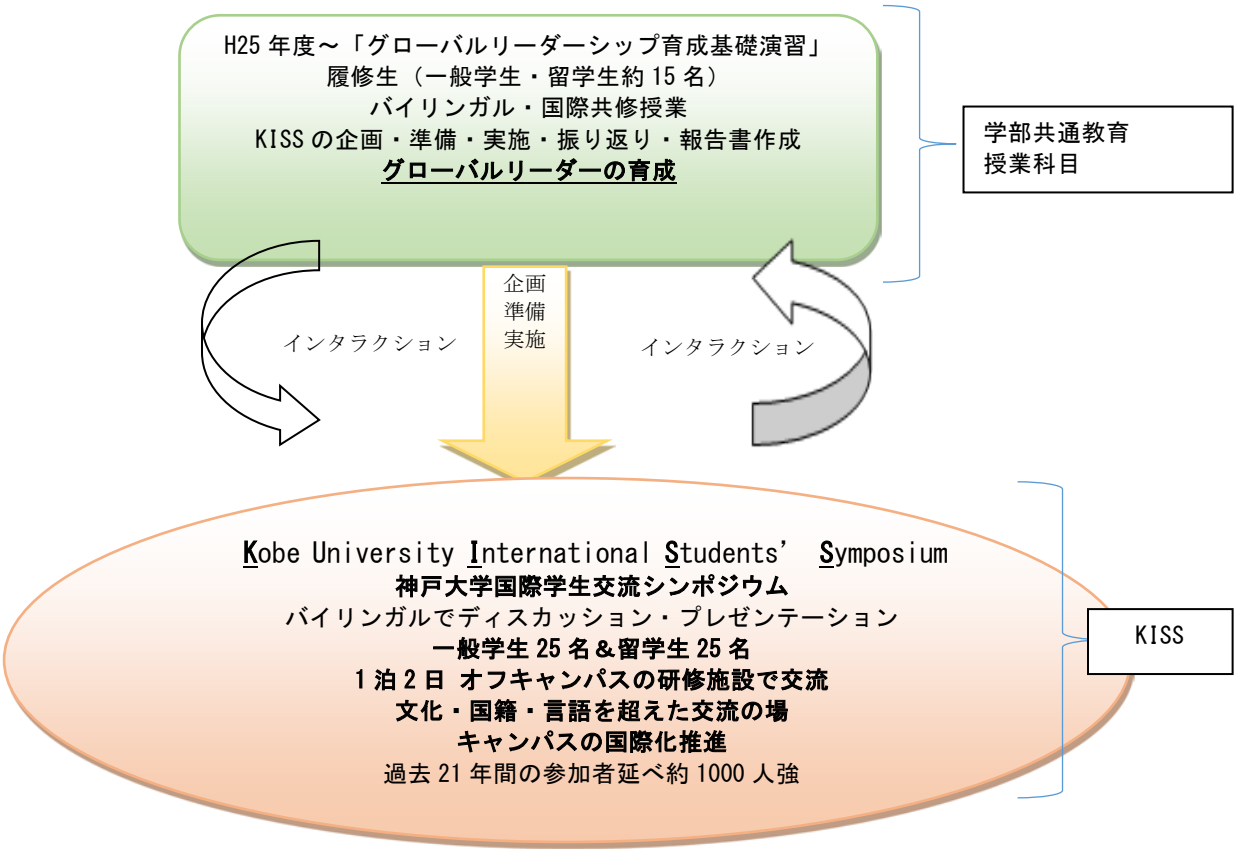

図 1 授業科目「グローバルリーダーシップ育成基礎演習」と KISS の関係

2-1. 「グローバルリーダーシップ育成基礎演習」（バイリンガルの国際共修授業）の到達目標

「グローバルリーダーシップ育成基礎演習」を開講するに当たり、筆者らが教員アドバイザーとして活動に関わる中で、経験的に認知してきた学生らの「学びの成果」を、「異文化間リテラシー」、「異文化間能力」、「異文化間コミュニケーション能力」の涵養という側面から捉えなおした。先行研究で

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

の知見（川那部 2006、坂本 2013、山岸 1997、Byram et al. 2002、Deardorff 2006等）を検証したうえで、本授業では、主として、認知的局面及び行動的局面の異文化間能力を向上させることを到達目標として設定した。まず認知的局面における異文化間能力として、「多様な文化的・言語的背景、価値観を持つ学生達が、KISSの開催という共通の目標に向けて切磋琢磨しながら協働することを通じ、社会の様々な事象を多様な視点から捉えなおすこと」とし、プロジェクト遂行に至る過程における一連の活動（情報収集・議論・折衝・発表・振り返りの報告書執筆）を通して、実践的な「異文化間能力」を涵養することを目標として設定した。ここで言う実践的な「異文化間能力」とは、異なる行動パターンや思考回路を持つ仲間たちとコミュニケーションを取り、文化接触に伴う葛藤などを克服しつつ、プロジェクト遂行のために良好な人間関係を構築し、「協働する姿勢・能力」である。異文化間能力の行動的局面と言い換えることができるであろう。

更に、本授業では、単なる言語能力ではない、「異文化間コミュニケーション能力」を向上させることを目指している。KISSは、1995年の初回より、ディスカッションでの使用言語を日本語と英語のバイリンガルとしている。その理由は、神戸大学に在籍する留学生の多様な言語レベルに配慮したことによる。留学生の中には、両言語とも非常に堪能な者、日本語が堪能な者、英語が堪能な者、いずれの言語も初級或いは中級段階に留まっている者など、極めて多様である。一般学生は、ほぼ全ての学生が日本語母語話者（或いは、日本語ネイティブレベル）である。中には、帰国子女や英語圏での留学を経験し、英語能力がネイティブレベルの者から、簡単な英語での会話が可能な者、或いは英語能力には全く自信が無いが、留学生との交流を望んでKISSに参加する者などこちらも多様である。

このように、KISSは、まさに、多文化化、多言語化が進んでいる日本社会と同様、多様な言語的・文化的背景を持つ参加者が集う小さなコミュニティである。このような多様なコミュニティの中で、参加者同士が議論を進め、グループでプレゼンテーションを準備する。その過程において、日英両言語を始め、時には、その他の言語を駆使して、意思疎通を図る姿が見られる。

そこで、本授業では、多様な言語的背景を持つKISSの参加者を迎える側として、単に日英両言語の運用能力の向上に重点を置くのではなく、他者の言語能力に配慮したコミュニケーション能力を向上させることを目標としている。授業のフィードバック等を通じて、履修生が、個々の言語使用を内省する機会を与え、流暢な英語・日本語を披露することを目指すのではなく、英語・日本語を母語としない人たちの立場に立ったコミュニケーションスタイルの涵養を図っている。以上、述べてきた本授業での到達目標をまとめたものが、表1である。

以下、次節では、到達目標の達成に向けて、「グローバルリーダーシップ育成基礎演習」の授業内外でどのような教育活動を取り入れているのか、具体的な授業スケジュールと共に紹介する。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

表 1「グローバルリーダーシップ育成基礎演習」の到達目標

授業の到達目標	理論的枠組み
1. 多様な文化的・言語的背景、価値観を持つ者同士、協働することを通じ、社会の様々な事象を多様な視点から捉えなおす。	異文化間能力における認知的局面
2. プロジェクト遂行に至る過程における一連の活動を通して、異なる行動パターンや思考回路を持つ仲間たちとコミュニケーションを取り、実践的な「異文化間能力」を涵養する。文化接触に伴う葛藤などを克服しつつ、プロジェクト遂行のために良好な人間関係を構築し、「協働する姿勢・能力」を身につける。	異文化間能力における行動的局面
3. 多文化・多言語なコミュニティのメンバーと協働するための異文化間コミュニケーション能力を向上させる。日英両言語で自らの意見を発信するスキルを向上させる。	多文化共生・協働のための異文化間コミュニケーション能力

2-2.「グローバルリーダーシップ育成基礎演習」の授業内容

当該授業は、後期（10 月～2 月）開講科目、週 1 回、1 コマ（90 分）、合計 16 コマ（15 コマ授業、1 コマ試験）で、2 単位が付与される科目となっている。具体的な授業スケジュール及び授業での活動内容を記したものが表 2 である。第 1 回目の授業では、授業の内容に関するガイダンスを実施している。KISS 誕生の経緯、KISS の 20 年にわたる沿革を振り返り、KISS の理念と合わせて、授業の到達目標、評価について、詳しく説明した。なお、本授業では、授業の性質上、90%以上の出席が求められ、少人数でのグループワークを主体としているため、履修者の選抜を行っている。

表 2「グローバルリーダーシップ育成基礎演習」授業スケジュール・内容

第 1 回	ガイダンス	授業の概要・評価に関する説明 神戸大学国際学生交流シンポジウムの理念・沿革について説明 ※授業後オンラインでエントリーシート提出
第 2 回	イントロダクション 履修者選抜	KISS の運営形態に関する説明 グループディスカッション（日・英）による履修者の選抜
第 3 回 第 4 回	メインテーマの検討	当該年度の KISS のメインテーマの検討 ※リーダー・サブリーダー・各分科会リーダーを選出
第 5 回 第 6 回	サブトピックの検討	分科会のサブトピックを検討 ※授業外でシンポジウムポスター、申込書等の作成
第 7 回	KISS 分科会でのディスカッションの進め方	授業担当教員による講義・ワークショップ
第 8 回 第 9 回	KISS 分科会に向けた資料収集・資料作成	グループワーク
第 10 回 第 11 回	KISS リハーサル	KISS の司会進行、分科会ごとのイントロダクションのリハーサル
第 12 回 第 13 回	KISS 開催	1 泊 2 日のシンポジウム運営 ※2 回分の授業としてカウント
第 14 回	KISS 振り返り	日英の報告書作成開始 ※12 月下旬に KISS 報告書草稿提出
第 15 回	KISS 報告書草稿確認 最終グループ発表準備	グループワーク
第 16 回	最終グループ発表	グループ発表（試験）・授業総括 ※1 月下旬に、学期末個人レポート及び KISS 報告書最終原稿提出

表 2 は、平成 27（2015）年度の授業スケジュールを示したものである。第 2 回目の授業にて、履修

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

者選抜のグループディスカッションを行い、結果、一般学生 9 名、留学生 8 名の合計 17 名の履修が決定した。留学生の国籍は、ベトナム 2 名、ポーランド 2 名、中国、韓国、マレーシア、オーストリアが各 1 名であった。履修者の所属学部は、国際文化学部 6 名、経営学部 3 名、法学部・農学部・理学部から各 1 名、留学生センター所属の日本語日本文化研修生が 5 名であった。学年は、1 年次 2 名、2 年次 4 名、3 年次 2 名、4 年次 2 名、その他特別聴講学生等（交換留学生、日本語日本文化研修生）が、6 名であった。本授業は、バイリンガルで実施しているため、授業時間を適宜区切り、冒頭 20 分は日本語でディスカッション、続く 20 分は英語でディスカッション、残り時間は、日英どちらでも発言可といった方式を採用している。

平成 27（2015）年度の授業では、第 3 回目の授業後、授業内外での活動及び、KISS を主導するリーダー・サブリーダーの立候補を受け付け、授業担当教員が立候補者の中から決定した。また、1 泊 2 日の KISS 本番では、50 名の参加者が、5 つの分科会に分かれて議論を行う。KISS の広報のためのポスター及び申込書の作成、当日のスケジュール策定等の作業などは、リーダー・サブリーダーが授業時間外にこれらの作業を担う。合計 5 つの分科会を担当する学生達は、各グループのグループリーダーを中心に、KISS 当日、どのようにディスカッションをリードしていくのかを念頭に、準備を進めていく。当日のシンポジウムで用いる資料は、全てバイリンガルで準備するため、留学生と一般学生が協力して作業を進めていく。また、一般参加者の募集が終了した段階で、KISS 参加者の分科会への割り振り、研修施設の部屋割り、KISS 参加者へのメール（日・英）での事務連絡等も、学生達が分担して作業に当たる。

図 2　KISS21 ポスター
神戸大学国際文化学部　田中香子氏作成

授業担当教員は、「アドバイザー」として授業内外での学生の活動を確認し、適宜、助言を行うなど、教育的介入を行っている。

また、2015 年度から、LMS（Moodle）のフィードバック機能を活用している。授業後に学生自らが、授業中の議論への参加、日・英両言語でコミュニケーションにおいて気を付けたこと、授業を通して気が付いたこと、更にグループワークでの活動内容及び、グループ活動への貢献度などを授業終了後に自ら振り返り、Moodle のフィードバック上で回答するという振り返りの活動を取り入れている。授業担当教員は、学生のフィードバックコメントを確認し、時機逸することなく必要に応じて、助言を行っている。

2-3.「グローバルリーダーシップ育成基礎演習」の評価と学び

最後に、本授業で採用している学生の評価指標及び履修生の学びについて述べておきたい。本授業

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

は、プロジェクトベースの授業であり、グループワークを数多く取り入れていることから、出席率は90%以上を要求している。評価については、授業・KISSへの参画（50%）、グループで行う振り返りのKISS報告書作成（25%）、最終グループ発表（10%）、学期末の個人レポート（15%）で総合的に評価している。

平成26（2014）年度までの授業では、教員による評価のみを採用していたが、平成27（2015）年度より、LMS（Moodle）での自己の活動の振り返りと学生同士のピアレビューを取り入れることとした。授業での活動だけでなく、授業外でのグループワークにおいても、個々の学生がどのような貢献をしたのか、自己評価とともに、学生同士がそれぞれの貢献を評価し合うシステムを取り入れることにより、より公平かつ適切な評価を行うことを意図している。

では、本授業を通して、学生達はどのような学びを得ているのであろうか。学生達のフィードバックや学期末の個人レポート、及び筆者ら教員による授業での観察を通して得られたデータを定性的に分析したところ、以下のような学びを得ていることがわかった。

第一に、本授業の到達目標としている異文化間能力における認知的局面について述べる。KISSでのメインテーマ及びサブトピックの選定に至る過程において、様々な社会事情に関する記事（日・英）に大量に目を通し、それについて、議論を重ねるという作業を行う。学生たちは、この作業を通して、一つの社会事象に対する多様な視点を相互に学ぶ機会を得ていることが分かった。次に、異文化間能力における行動的局面については、プロジェクト遂行に至る授業内外のグループワークにおいて、様々な葛藤や誤解、すれ違いを実際に経験することにより、「協働するために必要なコミュニケーション能力」を身につけていることがわかった。本授業では、授業内の作業だけでは不十分であるため、学生達は、グループごとに授業外に時間を確保して作業にあたる必要がある。その過程において、学生達は、具体的な作業の進め方において、これまで慣れ親しんできた「自分のやり方」が、ピアの学生にとって、必ずしも自明のことではないと身を以て実感することとなる。学生達は、互いにジレンマやフラストレーションを感じつつも、KISSの成功という共通の目的に向かって、協働していく姿勢を体得していく。

最後に、多文化共生・協働のための異文化間コミュニケーション能力の向上については、本授業が特に日本語母語話者にとって、貴重な学びの機会となっていることが分かった。授業の初期の段階では、学生達は、自らの言語コミュニケーション能力に対する内省を深めていく傾向がみられる。特に、日本語母語話者の学生が、英語を使用する場面において、自らの言語能力の低さ、自らの考えを論理的かつ説得的に述べられないことに対するフラストレーションを感じている。しかし、授業の回を進めるごとに、日本語母語話者は、自らが英語使用時に感じたフラストレーションを通して、留学生達が、日頃、日本社会で日本語を用いてコミュニケーションを取っていることに対する尊敬の念や、彼ら彼女らが感じているであろうフラストレーション、ジレンマに思い至るようになる。その結果、母

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

語である日本語でコミュニケーションを取る際に、ピアの留学生にとってよりわかりやすいコミュニケーションを心掛け、ゆっくりと話す、短文で話す、紙に書いて伝えるといった方略を次々に活用するようになっていく。留学生の側も、日本人学生がスモールグループでは、積極的に意見を述べるのに対して、大人数のグループになると、発言を躊躇する傾向にあることに気が付き、より日本人学生が発言しやすいような雰囲気を心掛けるなど、互いのコミュニケーションスタイルに対する配慮がみられるようになる。

3. おわりに

以上、本稿では、本学で開講しているバイリンガルの国際共修授業「グローバルリーダーシップ育成基礎演習」での取り組みを紹介した。KISSにおける教育活動は21年の歴史を持っているが、授業としては、開講から3年とまだ日が浅く、筆者ら授業担当教員も、毎回の授業を通して、履修生達と「協働」しつつ、授業内容、学生の評価方法など、日々試行錯誤しながら、改善を試みている状態である。学生の学修成果の評価やその分析については、まだまだ不十分であり、更なる検証が必要であるが、これまでのKISSの教育活動に関する取り組みを通して、このような国際共修の場が、多文化共生社会に生きる次世代の人材育成という点において、一定の効果があるのではないかと、確かな手ごたえを感じている。

特に、前節で述べた通り、言語的・文化的多様性を持つ学生達が、プロジェクト遂行に至る過程において、コミュニケーションスタイルの違い、物事の見方、考え方、進め方に関する違いを乗り越えつつ、フラストレーションを感じつつも、忍耐強く意思疎通を図り、交渉・妥協を重ねて協働していく姿は、多文化共生社会に生きる者として、必要な姿勢であると考える。学生達は、プロジェクトを通して、授業終了後も続く人間関係を構築しており、彼ら彼女らの姿は、国籍・言語・文化・人種を超えた協働の醍醐味を、大学のコミュニティに広く伝えるロールモデルともなりうるであろう。

神戸大学では、国際共修授業の規模という点において、先駆的な取り組みを行っている他大学に後れを取っているが、今後は、より多くの学生達に、授業内外の国際共修の場を提供することにより、多文化共生社会の次世代育成に向けて、貢献できればと考える。

---

[1] 本稿は、黒田・ハリソン（2016）の内容をもとに、加除修正の上、執筆したものである。

[2] KISSの誕生は、阪神淡路大震災が発生した1995年にさかのぼる。当時の神戸大学西塚泰美学長が、国際的な医学賞であるWOLF財団賞を受賞し、WOLF賞の副賞（5万米ドル）を被災留学生のために役立ててほしいとその全額を神戸大学に寄付した。その後、神戸大学では、地域の篤志家から寄せられた留学生への寄付も合わせて、基金を設立した。この基金の資金の一部を用いて、当時の留学生センターの教員がKISSを創案し、学生の実行委員を募り、第1回KISSの実施に至った。

[3] 本稿の執筆者のうち、ハリソンは第10回KISSから、黒田は第16回KISSから現在まで、教員アドバイザーを務めている。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

[4] KISSの授業科目設定の経緯については、黒田・ハリソン（2016）を参照のこと。
[5] 当該授業科目は、制度改編等を経て、平成27年度（2015年度）全学共通授業科目の中核的な授業科目群である「教養原論」に指定されている。

＜参考文献＞

（日本語文献）
川那部和恵（2006）「異文化理解教育における実践的アプローチの可能性」『奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要』15, 53-60.
黒田千晴・リチャード・ハリソン（2016）「神戸大学におけるバイリンガル国際共修授業:「グローバルリーダーシップ育成基礎演習」の授業設計について」『神戸大学留学生センター紀要』22, 89-105
坂本利子（2013）「異文化交流授業から国内学生は何を学んでいるか:多文化共生力育成をめざして」『立命館言語文化研究』24（3）, 143-157.
総務省多文化共生の推進に関する研究会『多文化共生の推進に関する研究会報告書:地域における多文化共生の推進に向けて』http://www.soumu.go.jp/kokusai/pdf/sonota_b5.pdf
堀江未来（2015）「多文化共修を促すコミュニティ形成と授業運営」第34回神戸大学留学生センターコロッキアム（於：神戸大学）発表資料
山岸みどり（1997）「異文化間リテラシーと異文化間能力」『異文化間教育』11, 37-51.

（英語文献）
Allport, G. W. (1979). *The Nature of Prejudice*. Cambridge, MA: Perseus Books.
Byram, M., Gribkova, B., & Starkey, H. (2002). *Developing the intercultural dimension in language teaching: A practical introduction for teachers.* Strasbourg: Council of Europe.
Deardorff, D. K. (2006). Identification and assessment of intercultural competence as a student outcome of internationalization. *Journal of Studies in International Education, 10*(3), 241-266.

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.